

第1回丹後地域における府立高校の在り方懇話会（概要）

- 1 日 時 平成28年2月24日（水）午前9時30分～午後0時10分
- 2 場 所 京丹後市峰山地域公民館 大会議室
- 3 出 席 者 28名
府教育委員会 川村指導部長、山笠高校教育課長、中島担当課長
山本丹後教育局長、堀田丹後教育局次長 ほか
- 4 概 要
 - (1) あいさつ
 - (2) 委員紹介
 - (3) 説明・報告等
 - (4) 意見交換（主な意見）

■指導部長あいさつ

府教育委員会では、社会情勢の変化や国の教育改革の動向を踏まえ、5年前に10年計画として策定した「京都府教育振興プラン」の中間見直しを行い、今後5年間に必要な施策を盛り込み、改訂を行ったところである。プランの重点として「学校の教育力の向上を図ること」を掲げ、少子化などの社会の変化や、地域の実情に応じた高校の在り方を検討する。また、全日制・定時制・通信制の各課程や学科の在り方を見直すなど、子どもの豊かな学びを支え、さらに、保護者、地域社会のニーズに応える充実した高校教育を展開することを明記している。特に府北部地域においては、子どもの数が減ることによって学校や地域社会での学びの質が低下するのではないかと懸念しており、そうしたことがないよう対策を立てて実行することが急がれる。

府教育委員会としては、今後、中学校を卒業し、高校に入学してくる生徒の数がさらに減少していく中であっても、より魅力ある高校教育を推進する観点から、府立高校の今後の在り方や活性化策について検討が必要であると考えている。そのため、まず、昨年8月から9月の3回にわたり、「生徒減少期における府立高校の在り方検討会議」を開催し、学識経験者、PTA、産業界、学校の先生方などに委員になっていただき、幅広く御意見をいただいた。また、検討会議では、府の南部、京都市、口丹、中丹、丹後と、地域によって状況が大きく異なることから、地域毎の地元関係者の御意見をしっかりと聞くことが重要だとの御指摘もいただいたところである。

その上で、今回、この丹後地域において、これまでから様々な立場で府立高校に関わっていただいている各界・各分野の皆様方にお集まりいただき、地域の実情なども踏まえて、高校としての教育の多様性を維持し、教育効果を高めるとともに、地域に貢献し、地域の将来を担う人材をどのように育成していくかといった観点で、それぞれの立場から御意見を賜る場として本懇話会を設けたところである。

本懇話会は年度をまたがって、進行によっては3回から4回程度開催させていただく予定である。3回目以降については後日改めて日程調整させていただくので、大変お忙しいところ恐縮だが、御協力をお願いしたい。

本日の懇話会が皆様のお力により、実りあるものとなるよう重ねてお願いする。

■丹後地域の府立高校の現状等について [府立網野高等学校 塩見校長]

○地域の最高学府としての高校の役割

- ・例えば、地域の諸行事、祭、文化の伝承、ボランティア活動など、多様な面で高校生なしに地域は成り立たない。特に少子化の波が進んでいる地域では、高校生が地域の担い手として活躍しており、高校生に期待する地域の声は非常に大きく、各高

校ともそのことも視野に入れながら、地域連携を視点として教育活動を進めている。

○学習面

- ・各高校が特色化を推進しつつ、生徒の学力を伸ばし、進路実現を図るという観点で努力している。予備校などの教育施設も少ないため、高校に対する地域の思いは強く、生徒もお金のかからない教育を望んでいるなど、府立高校への期待は大きい。
- ・授業第一主義を掲げ、子どもたちの学力を伸ばす。また、放課後の講習や補習、場合によっては中学校の振り返り学習をするなどにより生徒に力をつけるとともに、長期休業中においては各種講習などを開講して進学に向けても対応している。
- ・また、確実な学力をつけるため、例えば、学習合宿の実施や放課後に予備校のコンテンツを活用して、進んだ予備校の授業が受けられるようにしている。

○卒業後の進路

- ・比較的普通科志向が高いのが特徴で、卒業後は進学したいという生徒が多い。
- ・一度丹後から出たいと思っている生徒が多い反面、大学等卒業後には丹後に帰りたいという生徒も多い。網野高校を例にあげると、就職希望者は8名のうち地元に残る生徒は2名、他は全員進学希望である。
- ・地元に残って就職したいと思う生徒も多いが、最近の厳しい経済状況もあり、求人数が多くはないため、やむを得ず他地域を選ぶことになる。企業等の協力も得ながら、地域に残って就職できるよう後押ししている状況である。

○中学生から見た高校の様子

- ・中学校卒業後に、京都暁星高校も含めた地域の高校に進学する率が他地域よりも高い。例えば、府立学校に進学する生徒は例年85%程度である。丹後地域の中で子どもたちを育てるという意識を持ち、小・中・高が協力しながら努力している。
- ・近年、偏差値65を超える中学生数が減少してきていることが大きな課題であり、高校としても努力すべき点が多々あると考えている。小・中・府立学校の連絡協議会などで課題を共有し、校種間で連携して丹後地域の生徒の学力向上に努めている。
- ・普通科志向が強いながらも職業に関する専門学科（以下、職業学科）で学ぶ生徒もいる。例えば、海洋高校では、地域創生や地域の特色、地域の経済と密に連携をしながら各種の取組を行い、スペシャリストの育成を目指している。
- ・工業・商業・農業・家政に関する学科（以下、〇〇科と省略）などでは、生徒のニーズや経済状況に合わせながら、職業教育の充実に向けて特色化を進めている。キーワードは、高校だけではなく、地域の方や様々な業界関係者の皆様にも授業に入っていただきながら、また設備を整え、子どもたちを丹後全体で育てる、である。
- ・その結果、自分が学んできたことや身につけた力を生かして進学したり、就職したりしている。高校でしっかりと座学で学ぶとともに、実習で力をつけ、さらには産業界との大きなパイプによって職業人やプロフェッショナルを育てている。

○学校の規模

- ・私が採用された昭和53年当時、網野高校は8学級だったが、現在では普通科3学級と企画経営科1学級の4学級である。
- ・どの地域においても地域の中の高校は大切に、地域から高校が消えることは悲しく、地域の火が消えるという思いもあるが、学校規模が小さくなると、例えば、教員定数の問題や、多様なカリキュラムを置きたくても置けない。持ち時間数が少ない教科は講師に頼らざるを得ないなど、子どもの目から見てマイナスになる部分はある。
- ・一方で、小さいからこそ生徒に丁寧に目が行き届き、個々の希望進路が見えて、一人一人に合った教育活動を丁寧に展開できるという強みもある。また、何かをする時に小回りがきくという良さもある。懇話会では両面を見ながら議論を進めていく必要がある。

○部活動

- ・京都国体や京都インターハイを機に特色のあるクラブが数多く設置されるとともに、既存のクラブも活動が活発化した。例えば、久美浜高校のカヌー部や網野高校のレスリング部、新体操部。加悦谷高校のウエイトリフティング部、宮津高校のボ

ート部、海洋高校のカッター部やウエイトリフティング部などのように、全国トップレベルで争えるクラブも多々ある。中にはさらに大きな夢が現実となり、オリンピックへの出場やメダリストの輩出という成果に繋がっている競技もある。

- ・生徒のクラブ加入率が76%の学校が2校、80%~90%の学校が4校で、うち海洋高校にあつては97%に及ぶなど、生徒の教育活動の中で部活動が占めている率は高い。
- ・文化系クラブにおいても、各学校が地域において美術・書道展を開くなど、地域の文化活動の拠点となっていたり、活動の域が府内はもとより全国にまで広がるなど、高いレベルで活躍している。部活動の今後の在り方についても考える必要がある。
- ・生徒のニーズは多様であり、小さい学校でもできる限りのクラブを設置して活動をしているが、顧問の数が足りないので、複数のクラブを掛け持ちするといったことが生じている。また、さらに小規模化すると活動費が苦しくなる部分も生じてくる。

○ボランティア活動

- ・地域の祭や様々な活動に参加することで、自己達成感や成就感を味わうとともに、自己有用感を持つことで大きな自信に繋がっている。また、例えば、活動した内容が自分の進路に直結をしている生徒たちもいるなど、自分の生き方や在り方を考える大きな一つの場面となっている。

○特別支援教育

- ・与謝の海支援学校は地域の特別支援教育のセンター的役割を果たしており、様々な相談や、特別支援教育が効果的に進むようにアドバイスをする中枢機関として活躍をしている。また、障害のある子どもたちの学びの充実、自立と社会参加、進路保障に向けて努力しているが、丹後地域の中でも端の方に位置しており、また、校舎の使い勝手や老朽化による校舎の立て替えの必要性などの課題もある。今後、こうした課題についても解消していく必要があると思われる。
- ・中学校の特別支援学級で学ぶ生徒で与謝の海支援学校を選択するケースは毎年平均3名程度であり、多くは、地理的な条件や通学の関係など様々な条件のもと、府立高校の分校や定時制に進学している。どこでも学べるということも必要であるが、今後も特別支援学校が果たして行く役割は大きい。

○定時制（分校）

- ・かつては昼間に働いて夜に学ぶニーズが高く、また、交通の便も悪かったため分校が設置されてきたが、近年分校では、不登校を経験した生徒や支援学級に在籍をしていた生徒、ゆっくりと確実に学びたい生徒、さらには経済的な理由から働きながら学びたい生徒など、多様なニーズの子どもたちが学んでいる。昔と異なり、幅広い地域から通学してきている。200円バスの導入などにより通学の利便性が高まっているが、中にはバスを乗り継いで通学するなど、通学が大変な生徒もいる。
- ・定時制は、様々な課題を持ちながらも、多様なニーズをもって入学してきた生徒が、しっかり、ゆっくり、確実に小さな空間の中で自分の生き方・在り方を考えるとともに、自信をつけて高校を卒業し、きちんと就職なり、進学を勝ち取っているという役割を果たしてきた。現在学んでいる生徒と同じようなニーズのある生徒が、小さな単位で学べる場は必要ではないかと考えている。
- ・伊根分校では、4年次のほとんどの時間を就業体験に費やし、社会性や働くことの意義、自己責任感などをしっかりと身につけさせ、社会に送り出している。間人分校でも3年生でインターンシップを行い、働くこととはどういうことか、あるいは自分に向いている職業は何かといったことを考える教育実践を行うことで、4年次には希望する就職や進学を勝ち取って卒業している。

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

- 与謝の海支援学校の施設が老朽化しているとあった。耐震化についてはすべて実施されたとも聞いているが、高校の校舎の耐震化や耐用年数はどういう状況か。
- ◆ 一部の分校の木造校舎など、施設として課題があるものはある。なお、鉄筋校舎

の耐震化については、丹後地域に限らず府立高校全体として、本年度でほぼ完了する見込みである。支援学校の耐震補強はすでに完了しているが、与謝の海支援学校については敷地がフラットでないこと、また、敷地に入る手前の坂が非常に急であるといったことも含め、支援学校としてのバリアフリー的な機能や性能において、また、全体に老朽化してきているという課題がある。

- 年度をまたいで懇話会が開催されるとのことだが、このメンバーは充て職のように思う。年度をまたぐことで職が変わった場合、メンバーを変えるのか。
- ◇ 基本的には年度をまたいでも継続でお願いしたいと考えている。ただし、人事異動等で異なる地域に赴任される、あるいは退職されるということがあれば、新たな方に出席をお願いすることもあると考えている。
- 今後急激に少子化が進んでいく中で、何年間を想定して高校の将来の在り方を検討するのか。中学校卒業生徒の増減については、資料として平成41年度まで推計されているが、10年、あるいは20年、30年というスパンで考えていくのか。
- ◆ 丹後地域の中学校卒業生徒数は、来春かなり減り、以降もさらに減少していく。生徒数の減少により各高校の募集定員が小さくなると様々な懸念が生じてくる。本年夏頃には計画を策定する予定としているが、すべてがその時点で決まるというものでもない。例えば、課程の置き方や学科の在り方などについてはある程度方向性をお示しして、その後、教育課程の内容を詰めたり、さらには、産業界の変動もあるので、その後何年かかけながら取り組んでいくことになる。今後10年、20年となると、社会の動きや情勢が変わってくる。高校の学科の置き方などは常に見直しをかけているところであり、大枠を考えながらも、微調整をしながら進めていくことになると思う。現在の小学校6年生が平成31年度に高校に入学する。仮に、この夏にプランを固めても、自分が入学する学校が将来どうなるかという姿が見える形で入学させたいと思っているので、2年先、3年先の変動についてはある程度見通しを立てていきたいと考えている。
- 学校規模についてはどうか。急激に減少する2、3年先を見越して検討し、仮に4、5年先に生徒数が半減した場合はどうするのか。何年先まで見通して考えていくのか。
- ◆ 配付資料の2頁の資料は、平成25年度を起点に各通学圏ごとの中学校卒業見込生徒数の推移をグラフにしたもので、一番下のブルーの線が丹後地域の推計である。現在1歳の子供が中学校3年生になる平成41年度には、平成25年度比で57.6%になると推計している。したがって、現在把握できる限度である平成41年度までを見通しながら考えているところである。
- 農業科は久美浜高校と弥栄分校に設置されているが、昨今の人口減少は産業の在り方によるのかと思うところもある。極論を言えば、子どもたちが帰って来ない状況を考えると、仕事としてどうかと問われているように感じている。現在、日本の農業においては、平均68.8歳の高齢の農業者が支えていると言われている。丹後地域には素晴らしい農地があり、特産物もあるが、では誰が今後守っていくのか。新規就農者については京都府でもいろいろと手立てをしてもらっているが、現実的にはおじいちゃんやおばあちゃんが頑張っているという構図である。私も普通科出身であるが、こうした現状を踏まえると、今後は、高校の普通科でも一次産業の在り方や専門的なものの考え方など、地元の産業の在り方についての教育をしてもらわないと、丹後地域に帰ってきてくれないのではないかと思う。仕

事として、産業として、農業も個人経営ではなく会社経営にして、従業員が働く場の育て方など、幅広い考え方をもって、産業としての農業の在り方に向け、大学などと一緒に取り組まなければならないと考えている。

全国の国公立大学に農学部はほとんどなくなった。それが現実なのかと思いつつ、高校での専門的な学びを基礎にして大学に進学し、大学で学んでまた帰ってきてもらう。あるいは、農業産業として位置づけられる仕事を持って帰ってきてもらうということが、一番の理想だと感じているところである。

一つ質問があるのだが、参考資料の産業教育審議会の提言の中に、「京都フレックス学園構想等」という記載があるが、どういう構想か教えてもらいたい。

東海大学の農学部では女性の農業者がかなり増えている。弥栄分校には女子は少ないようだが、これからは女性が農業をする、女性が引っ張っていく時代も来るのではないかと思う。そうした将来の夢も持ちながら、丹後地域において農業が産業として成り立てるような教育を高校で行ってもらえればと思っている。

少し話は変わるが、この春、網野高校がなくなるという噂が一人歩きをしている。今日、初めてこういう会議が開かれるのに、どこからそういう噂が流れるのかという苦言を申し上げておきたい。

- ◆ 京都フレックス学園構想は、不登校経験があったり、学校に通いにくいなど、様々な学習経験のある生徒が、自分のペースで学べる居場所づくり（や多様で柔軟な教育システムの構築）を目指したものであり、この構想に基づき、平成27年4月、京都市内に府立清明高校を開校したところである。

丹後地域においては、現在、分校がその役割を担っており、例えば、農業を通じた人間づくりなどに取り組んでいる。そのため、農業教育を考えるにあたっては、フレックス学園構想という観点もしっかりと押さえながら検討する必要があるという提言をいただいたところである。

- 久美浜高校にはかつて農業科が設置されていたが、現在は総合学科として、入学してから自分の進みたいコースを選ぶという学習形態である。その中で、特色ある農業教育として、クロマツの植林を行ったり、農業法人の方に農業の魅力を教えていただいたりしている。また、京都精華大学の教授に話をさせていただいたり、卒業生が進学した鳥取環境大学に視察に行き、近隣の農業高校を見学しながら、先輩から大学の魅力について話をしてもらうなどの取組も行っているところである。さらに、校種間連携の取組として、保育所などに行って種まきや鉢上げなどの指導をしたり、本校の水田を利用した田植えから稲刈りまでの実習にも取り組んでいる。

また、本校には福祉系列もあるので、地域の福祉施設で実習を行っている。先日も聴覚障害者地域センターに出向いて、交流を深めたところである。

このように、従来は農業であれば、栽培して販売するといったことに限っていたが、もっと視点を広げ、大学等に進学した後にこの地域に帰ってきてもらえるようにという思いをもって生徒を育成している。

- 地元峰山高校の産業工学科には非常に期待をしている。また、宮津高校、網野高校、海洋高校、久美浜高校にも職業学科が設置されているが、普通科とは切り離して職業学科を置く専門的な高校を設置し、専門的な知識を身につけて実社会に出る。また、大学等に進学した後に帰ってくるという体制をぜひつくってもらいたい。

併せて、その高校を出たから即就職ということではなく、幅広い選択肢として、上級学校に進学できるような体制もとってもらえると、両方の学校が中途半端な体制ではなく、より一層専門的な形で進展していくのではないかと思っている。

先ほど地元の企業に就職しにくいとおっしゃったが、これはある意味、業界と高校とのつながりが弱かったためだと考える。これまでのインターンシップは職業学

科の生徒が対象であったが、もっと幅広く、普通科など分野の異なる学科にも呼びかけ、1週間、2週間のインターンシップではなく、高校生段階において、地元にもこんなにすばらしい企業があるということを知ってもらうといった取組をすることで、一旦、丹後地域から出て、また帰って来て就職する、ということにつながるのではないかと考える。ぜひともそうした取組をカリキュラムに取り入れてもらえるとうれしい。峰山高校においては、すでに今年から積極的に取り組んでもらっており、我々の業界としては大変ありがたい。

- 以前地元高校の再編が行われた際にはあまり意識をしていなかったが、よくよく考えると、我々の先輩方が卒業して地元で貢献している学科がなくなり、あまり貢献していない学科が残ってしまっている。数合わせをされてしまったのではないかと、当時何もできなかったことに対する反省も込めて感じているところである。

宮津高校で言えば、商業科や電気科、建築科を卒業した方々が地元に残って地元を支えてこられた。普通科の卒業生は地元で貢献せず、地元を出て行ってしまっている。こうしたことがその当時議論されたのだろうかと思うところである。

普通科志向が高いということだが、それは今残っている学科が普通科であるからではないのか。文部科学省は、1学年8学級を基本にしていると聞いているが、本府においては、例えば1学年3学級となった場合にはどういう編制が良いのかということになってくるのだと思う。

職業学科を卒業したから地元で就職するというのではなく、様々な学問・学識を持っている方が学んだ分野と全く異なるところに就職するというのも最近が多いので、あまり学科にこだわらない方が良いとは思っているが、この地域に今後必要な学科や高校とはどういうものかについて、今一度考える必要があるのではないかと。農業や林業を専門にする高校はあるのか。工業を専門にする高校はどうか。そうした中で、常時人手が足りないと言われている看護や介護などの分野も含め、今後この地域にどのような分野の学科が必要なのかを考えていく必要がある。

また、データを基にすると子どもが減っていくという話ばかりになるが、この地域に魅力を感じ、海洋高校のように他地域から来てもらえるような高校はできないのかということも考える必要がある。他地域から来て海洋高校で学び、高度な技術を身につけてこの地域に残ってくれる生徒がいる反面、地元の子は出て行ってしまっているという傾向になってしまっている気がする。

地元に残ってくれた子どもたちが地域を支えていくことになるので、他地域から来てみたくするような学校や学科はどのようなものかといった議論も大切ではないかと思うので、ぜひそうした議論も進めてもらいたい。

- ◇ 地域に必要な人材の育成として、今年度策定された各市町の地方創生の総合戦略と関連して、高校生に期待することや高校生に今後身につけてもらいたい力などについて御意見をお願いしたい。

- 宮津高校や海洋高校、地域が一体となって様々な取組をしていただいております、府立高校は地元にとってなくてはならない存在である。また、京都暁星高校においても、全国から進学してきた生徒たちが、この地域で様々な取組をしてくれている。しかし、高校在学時には地域とつながっていても、残念ながら卒業して一旦この地域を離れた後に再び帰ってきてくれる方が非常に少ないという状況にある。そのため、高校の学びの中で地元を理解してもらえるような、また、行政に参画してもらえるような取組ができないかということを中心に考えていきたいと思っている。

それぞれの地域にとって必要な人材を育成するというのであれば職業とのつながりは欠かせないが、宮津市の高校で製造業について学ぶということがすぐに実現するとは思えないので、その分野は京丹後市の高校で取り組んでもらうなど、

丹後地域全体で子どもを育てて、丹後地域全体に帰ってきてもらうという考え方をしていかなないと難しいのではないかと。一つの市町の中だけで考えて人材を確保し、就職先を斡旋していくことには無理がある。面的な関係を重視し、広い範囲で捉えて協議をしていく必要があると思っている。

ただ一方で、本市に帰ってきてもらえるような教育にも取り組んでもらえればと思っているので、その点は今後一緒に検討していきたい。

- 地方創生の観点で言えば、要は人口が減るのを食い止めたいという思いである。本市においても、子どもの数が少ないことや施設の耐震化といったことを背景に、この間、非常に苦労をしながら小・中学校の再編を進めてきた。

地域の方々は、「子どもたちは減っているが、学校がなくなるということは地域が寂れることにつながる。子どもの声が聞こえなくなるようなことは避けたい。」と思っている。一方で、保護者の中には、子どもが少なくなると教育上どういう課題が生じるのかという観点から再編という形を選択された方もいる。

そうしたことを踏まえると、京丹後市には多くの高校があるので、どういう形で地域に説明し、どういう形で進めていくのかが気がかりである。経験上、8月に方向性を出すことには無理があると思われる。本市では4月に市長・市議会議員選挙を控えており、そうした中で、4月、5月に懇話会を開催して、6月頃にはまとめるという乱暴なやり方はいかがかと思う。首長の意見もいろいろあると思うので、8月に方針を出すという結論ありきでは進めないでもらいたいと強く申し上げておく。

- 高校生に特化した形での具体的な戦略は掲げていないが、これから始まる議会においては、高校生に限らず、小学生、中学生、高校生がのびのびと学校に通い、様々な教育が受けられるという教育環境を整えるための事業にかかる予算を上程しているところである。

本町にある伊根分校は、本当に小規模で、現在では総数で40名足らずである。以前は1学年が40名、50名という規模で、ほとんどが町内あるいは橋北地域の生徒であった。ところが最近では、地域からの入学生は少なく、平成27年度はゼロである。そういう中であっても、分校の生徒と町がともに地域活動を行ってはいるが、もう少し早くから町と伊根分校とのつながりについて、しっかりとした政策を持っておけば良かったのかと深く反省もしているところである。

- 国を挙げて地域創生に取り組もうとする中、各市・町ともその計画を立てている。総じて、少子化というか、人口減少に立ち向かうための様々な施策を各市町とも打ち出されていると認識している。1年、2年で実を結ぶかどうかは別にして、自治体がそのように人口減少対策に向かっていく中で、高校の在り方は非常に大きな位置を占めるのではないかとと思っている。言い換えれば、水を差すようなことになってはいけないのではないかとこの思いであり、個々の学校ということではなく、丹後全体でそれぞれの高校の役割を考えていくのが良いと思っている。

特色のある学校を打ち出そうとして同じ学科で競り合ってもつぶし合いになる。特色のある学校をつくるためにはどうすればいいのかということを考えていくのが良いのではないかとと思っている。いずれにしても、高校が地域に果たす役割は非常に大きいので、そのあたりは府教育委員会にも慎重に考えて、案を練ってもらいたいと思っている。

与謝野町には加悦谷高校と与謝の海支援学校があるわけだが、地元からすれば両校がなくなるということは、町政の推進に水を差すという結果になる。我々も今後意見を出しながら、形は変わるにしても、よりよい方向に進むことを希望したい。

- 先ほども専門的な学びの話があったが、久美浜高校では単位制の総合学科におい

て、子どもたちがどのような学びをしているのか、普通科との違いを含めて教えてもらいたい。

- 他校と同じで、多くの生徒が進学を希望している。本校には、文理特修系列、教養系列、福祉系列、生産科学系列があり、1年間学習をする中で2年次から自分の行きたい系列に進んでいく。文理特修系列が約33%、教養系列が約50%、福祉・生産系列がそれぞれ10%程度という選択状況である。

系列ごとに特色を出していこうということで、特に職業系の農業や福祉については、先ほども述べたように、地域の方に講演に来ていただいたり、国営農地で実習をしたりと、地域に応援していただきながら様々な取組を行っている。

- 高校は地域にとって大きな役割を果たしており、何とかして、規模は違っても存続はお願いしたいと考えている。私も中学校現場にいたが、中学校3年生の段階で、はたして生徒は志を持って専門学科等々に進学を決めているのだろうか。おそらく普通科志向になるのは、明確な進路選択ができかねているからではないかと思っている。

したがって、できれば高校に入学してからコースなどを選択できることが望ましいと考える。中学校においても、できる限り職業体験学習や高校の体験学習等々に取り組んでいるが、自分の適正はどこにあるのかということろまで見極められていないのが現状であり、それが普通科を志向していく傾向につながっているのではないかと思っている。

- すべての中学校3年生が高校の教育内容を理解しているわけではないし、専門学科の内容をしっかりと理解しているということにはなっていないと思う。中には、「僕は水産に関する職業に就きたいから海洋高校に行きたい。」「網野高校の企画経営科で学びたい。」「私はこの部活動で頑張りたいから〇〇高校を選ぶ。」という生徒もいるが、全体としては普通科志向が強い。京丹後市の中学校でも、与謝野町の中学校でも同じだろうと考えている。

- 高校の再編について、巷で様々な噂が出ていると先ほどあったが、PTAの方からもそうした声が出ている。私も床屋に行った時に、「どうなるのか。」と聞かれたことがある。床屋には多くの方が集まってくるので、そうした話題が多いのかと判断しているところである。「それはまだ何も決まっていませんよ。」と返しているが、噂だけが先行しているという状況があり、とても心苦しく思っている。

仮に、高校が地域からなくなるということは、地域の活気がなくなるのではないか。しかし、少ない生徒数で高校を存続していくと、その地域が活性化することは良いことだが、その高校の活性化としてはどうなのかとも思う。

具体的な話になるが、今年度の中学校3年生は1000名を超えているが、来年度は900名台と180名近く一挙に減少する。次年度、丹後通学圏の府立高校や京都暁星高校を含めて、中学校3年生がどのような進路を選択するのかと大変苦慮している。生徒たちが、「こんな状況なら勉強しなくても高校に入れる。」と思うようなことだけは避けたいと思っている。高校入学がすべての目的ではないが、確かな学力をつけていくこと、将来にわたって学習ができる力をつけていくことが中学校教育の目標だと思っている。

- 中学生の進路選択についてだが、現在、中学校卒業生に対するハローワークからの求人はゼロである。つまり、すべての生徒が進学を考えなければならないということである。もしも就職を考えるとすれば、縁故就職など自分で探さなければならない状況である。

そうした中、先ほどから出ているように、中学校3年生段階でどこまで自分の将

来を見て考えているかという点、まだまだ判断できていない生徒が多いだろうと感じている。その中で、この地域は交通面で必ずしも便利ではないため、通学可能な範囲で高校を選ぶ生徒が多いのではないかと感じる。例えば、宮津市の中学生が久美浜高校に行こうと思うと、かなりの通学時間がかかる。鉄道沿線ならまだしも、沿線から離れたところに住んでいる生徒にすれば、かなり通学が困難であるということも考えると、通学が可能なという言い方が良いかどうかはわからないが、通学がそれほど困難でない高校を選んでいるのが現実ではないか。もちろん、中には志を持って、「〇〇高校に行く。」という選択をしている生徒もいるが、多くの生徒は悩んだり、通学を考えて選択しているのではないかと感じている。現在の入学者選抜制度になって、かなり選択幅が広がったため、必ずしも地元の高校を選択しているとは言えないが、通学が困難でない高校を選択している生徒は多いと感じている。

- 保護者の立場から言えば、地元の高校に通えることが一番幸せだなどと感じる。通学の負担ということもあるが、できれば地元の高校に通わせたい。ただし、学科が分散して設置されていることもあり、自分が行きたい高校に入りたい学科があるかどうかという点は課題である。

久美浜高校の総合学科には伊根町や宮津市からも進学が可能であるのに入学者が少ないということは、やはり通学面が大きな要因になっているのかと思う。学校の規模もあるが、通学面から選択できる学科がある程度しぼられてくると、普通科志向ということになってしまうとも思う。

また、先ほど地元就職の話が出ていたが、海洋高校などはまさに専門性の高い高校だが、例えば、舞鶴市にある日星高校のように、中学校卒業後に進学して看護師などの資格を取れるような学科についても考えてみるのも良いのではないかと感じる。

- 我が家には中学校3年生の子どもがいるが、高校を選ぶにあたってそれほど強い志を持って選んでいる15歳の子はなかなか少ないと思うので、高校に入ってからわりと柔軟なカリキュラムから選択できるような形が理想ではないかと思う。また、専門的な学科を選んだ生徒についても、いろいろ選択肢があるようなカリキュラムがあった方が良く感じる。

少子化の影響は圧倒的なものだと思うので、一保護者としては少子化による教育の質の低下については看過できない。質の低下が本当に生じるのかとも思うし、そういうことはあってほしくないと思っている。子どもが少なくなるということは歴然とした現状だとは思いますが、自分たちの子どもに、「あなたたちはこの地域に生まれたから辛抱しなければいけない。」とか、「この地域に生まれたからかわいそうだね。」というようなことだけは保護者としては言えない。

「この専門性のある学科に行きたい。」「この先生の指導する〇〇部に入りたい。」という志を持って進学をする子どもたちもいるので、より継続的で安定的な間口を持ってもらいたい。

- 保護者としては、通学の問題も踏まえ、丹後地域で育った以上は高校ぐらいまでは自転車やバスで通える程度の学校に行ってもらえるとありがたい。福知山市などの私立高校に進学するとなると、電車を使うにしても遠い。高校は単に大学進学のための予備校なのかということも考えてもらいたい。

みなさん共通の認識はお持ちだと思うが、保護者に聞きたいことは何なのかということをもう少しははっきりさせてもらえば、それに応じた意見も言える。

- 本校は網野町域にあるが、京丹後市では平成28年度から小中一貫教育が全中学校区で全面実施になるため、網野町内においても昨年度から取組を進めている。そうした中で、現在、保育所・幼稚園と小・中学校、さらには網野高校とも連携をして、授業研究や交流を持っている。また、本校の理科クラブに高校からボランティアで

来てもらうなど、日常的な交流についてもお世話になっているので、地域の子もたちの先輩としての姿を網野高校生には感じている。

小中一貫教育の中で、小学校としては中学校の先輩の姿を見て学ぶ機会が多いが、その先の高校についても手本としていきたい。地域でのボランティア活動などに中学生や高校生が積極的に参加しているので、小学生がそういうところで一緒に活動する中で、その姿から学ぶという効果は大きい。また、教育活動の中にも柔らかな形で入ってきてもらえるという点で、可能性の広がりを感じている。高校生の姿を手本として、小学校においても、学力充実に向けた取組を進めるとともに、自分たちの地域を大切にしていこうという豊かな心が育成できればと思っている。小学生は地域の中で育っている所以、地域の豊かな自然や多くの方々と触れあうと学習意欲も高まり、地域への思いも深まっていく。その気持ちがつながっていくような形で高校の在り方の検討をお願いしたい。

- 少子化における児童の実態として、小学校低学年における学力的な面、生活の自立面での課題がかなり大きいという傾向が年々顕著になってきている。この要因としては、困難家庭が非常に増えている。さらにいえば、貧困家庭が急増しているということがあげられる。先日も新聞等で報道されたが、そうした生活基盤が背景にある中で、小学校における学びや育ちにまっすぐに向かいづら子どもたちがかなり増えている。国全体で6名に1名が貧困家庭であり、先進諸国においては最下位といわれるなど、大きな課題となっている。

また、発達面で課題のある児童も年々増加傾向にある。文部科学省の発表によると、通常の学級において発達の何らかの支障のある児童が6.5%であるとのことだが、実際には6.5%にとどまらず、2桁の数値のエリア内といった状況である。さらにいえば、困難家庭や貧困家庭を背景とする子どもたちは二次的な障害があるという傾向もあり、小学校現場においては就学前や低学年の子どもの課題がクローズアップされている。

年回りで今の就学前や低学年の子どもの課題が大きいという状況ではない。幼稚園・保育園・保育所の長や保育士等との連携を強めているが、年長・年中・年少において同様の傾向があり、個別の支援を要する児童が非常に増えているという現状がある。そのため、これまでから学校現場に求められているのは学びの連続性ということである。小学校のみならず、保幼小中高の学びの連続性を維持していく。また、質を高めるという課題がある。自己課題としても肝に銘じている。府立高校の先生方と交流する機会は少ないが、小中高の学びの連続性、そして指導の質を連続的につなげていく中で、魅力ある高校生活や一人一人の生徒たちの将来目標、社会的自立に向けての方向性が見えてくるのではないかと思う。

- 高校の在り方と特別支援教育との関係において、多様な学びの場という視点も入れてもらえればと思う。

与謝の海支援学校は開校48年を迎え、施設設備の面での老朽化や立地条件などから、建て替え、もしくは移転ということも視野に入れて考えていく時期にきている。特別支援学校として地域の特別支援教育のセンター的機能として、小・中学校も含めて巡回相談をしながら、特別な教育的なニーズのある子どもたちに対する具体的な支援を一緒に考えさせてもらっている。また、就学前の子どもたち、小・中学生、最近では高校生の相談も増えてきており、連携を進めているところである。

特別な支援を必要としている子どもの割合は、文部科学省によると6～7%であるが、1割を超えているというのが現場の先生方の実感だと聞いている。現在、インクルーシブ教育システムの構築が教育界で提唱されている。これは、障害のある者と障害のない者とがともに学び合うシステムをつくらうということで、障害者差別解消法が施行されるということもあいまってのことである。

具体的にインクルーシブ教育システムというのはどういうものかということ、大き

く3つある。1つ目は、同じ場で共に学ぶことを基本に追求していくこと。2つ目は、教育的なニーズに最も的確に応える指導を提供していくべきだということ。その中で障害者差別解消法との問題等々もあり、この4月からは学校現場で合理的配慮をいかに行うか。企業はどうなのかということが求められている。3つ目は、連続性のある多様な学びの場をつくっていく必要があるということである。中学校の特別支援学級で学んでいる生徒たちの卒業後の進路である。特別支援学級で学んでいる子どもたちの多くは、発達障害というより知的障害があると考えていいと思っている。したがって、その子どもたちは、本来であれば与謝の海支援学校に進学することになるのだが、実際には、ここ5年間ほどのデータを整理してみると、本校に来ている子どもたちは20%弱、多くても20%で、他の卒業生は高校に進学している。つまり、この丹後地域においては、まさにインクルーシブ教育が実際に進められつつあると見ていく必要があると考えている。

現在、本校では、「交流及び共同学習」という視点で弥栄分校と学習交流も進めており、相互に行き来しながら高等部生と高校生が共に学ぶ場をつくっている。また、加悦谷高校とは、オリンピック・パラリンピックの推進校ということで、相互に生徒が行き来しながら、部活動や体育的な活動を通して交流を進めている。こうした活動を通して、同年代の生徒が教え合ったり、励まし合うなど、お互いの顔が見える関係を通じて成長していくという可能性も見えてきたところである。したがって、分校や定時制、高校の在り方を考えるにあたっては、ぜひ特別支援教育の観点も入れていただき、いろいろと考慮してもらえるとありがたい。それが先ほどおっしゃっていた学びの連続性にもつながっていくのではないかと考えている。

すでに同一敷地内にある八幡支援学校と京都八幡高校南キャンパスにおいては、様々な取り組みが進められている。同一敷地内にあることで、例えば、作業的な内容を共に学ぶこと、スポーツ的なことで共に学ぶこと、部活動を通して共に学ぶことなど、様々なことが展開できるのではないかと考えている。高校のことだけではなく、特別支援教育の観点や与謝の海支援学校の移転のことも含めて検討してもらいたいと思っている。

丹後の地ではまさにインクルーシブ教育システムが現実に行われている。府教育委員会の打ち出している京都式インクルーシブ教育システムをこの北部地域から具体的な形で発信するということも、この構想の中では入れてもらいたい。

◇ 少子化の中、小・中学校ではすでに先行して再編等も行われている。その際の視点や小中高連携などについて、どのような観点でもよいので御意見をいただきたい。

○ 現在、宮津市では小・中学校の再編に向けて取組を進めている。その背景は、やはり少子化である。子どもたちの学びの場という視点でいえば、小さい集団でも学び得るものはたくさんある。また、大きな集団だからこそ学び得るものもたくさんある。しかし、現在、宮津市が抱えている大きな課題は、あまりにも小さすぎることである。地域の方にもいろいろとお話をさせていただく中で、緩やかではあるが、再編を前に進めてきている。

以前、府立高校にいたことがあるが、高校が本来持つ姿は多様なものであり、高校には魅力と力が必要だろうと思っている。中学校の再編時には、子どもたちはクラブを選べない。体育系クラブが男子1種目、女子1種目。文化系クラブは設置できないという状況が続いていた。子どもたちは文句を言わなかった。しかし、周囲の大人の心配ごとは2手に分かれた。保護者という立場で、「これでいいのだろうか。」「うちの子どもは本当にこんな小さな集団の中で大丈夫なのか。」という心配と、「地域の中から学校がなくなったらどうなるのか。」という心配である。このすみ分けは本当に難しい。しかし、子どもたちがこれから様々なことを選択していくにあたって、希望を持って高校に行けるような環境を大人がしっかりとつくってやらなければならない。そのことについて、これからみなさまとともに知恵を出して

いかなければならないと思っているところである。

- 京丹後市では大変大規模な学校再編に取り組んできた。平成19年から着手したので間もなく10年になるというほど時間をかけている。説明に回るまでに、まず地域の保護者の方を中心にした検討委員会を持った。1年ほどかけて御意見を聞き、その上で、学校再配置の案を1案、2案、多いところでは3案示して説明会に回ったが、その内容を理解していただくのにもかなり時間がかかった。地域における学校の果たす役割や果たしてきた役割の大きさというものを、説明会の会場ごとにお聞きしたと思っている。

そうした意味でいうと、本懇話会は本日初めて開催されたものであり、3回または4回程度の開催で、8月末に結論を出すというのは早すぎないか。特に、小学生や中学生の保護者の方に説明しきれぬのかという気がしている。市と府の違いがあるので、そのことをどうこうは言えないが、市民の方、特に保護者の方がある程度理解をしていただけるようにあるいは、理解とまではいなくても仕方がないと思っただけのような形にまでぜひ持っていくような方法を考えてもらいたい。

また、人口の減少や高齢化の中で地方の元気がなくなることから、地方創生ということが言われている。地域に貢献をし、地域の将来を担う人材をどのように育成するのか。このことは大学の問題でもあるかもしれないが、丹後地域においては高校が最終の学校である。そうした中で、地域の将来を担う人材を育成していくための新しい学科再編についてもいろいろと工夫しながら、「うん」と言ってもらえるような案をぜひ示して欲しい。

- 再編について、伊根町としては府教育委員会の長期的な判断に基づいた方針には従うつもりである。ただし、宮津・与謝地域にも定時制高校は必要ではないかと思っている。したがって、伊根分校が存続されるのであれば、しっかりと全面改築をしてもらいたい。もしも、全面改築ができないというのであれば、一市二町のどこかに、通学への配慮を十分した上で、分校機能を果たしうる同等の施設を確保してもらいたい。必ず伊根町に置いてもらいたいというつもりはない。

- 改めて、私の高校3年間は何だったのかと考えている。伊根町には宮津高校の分校があるが、かつては、伊根町の子弟のほとんどが分校で学んでいた。現在、70歳、80歳代の方々であり、その方々が伊根町の漁業や農業をしっかりと支えてこられて現在がある。5つの港を守り、62平方キロメートルのほとんどを占める山林や農地を守っていただいている。働きながら学ぶといっても、かつては伊根町から宮津高校や水産高校にはなかなか行けなかった。蒲入や筒川からの交通網が発達しておらず、昭和37年頃は5時50分に船に乗って宮津高校へ通うというような状況であった。筒川や本庄の方々も寮や下宿生活であり、保護者の負担は大変だったと推測する。府からの通学費補助はあったとはいえ、そうした大変な思いをした方々が、今の私たちを育ててくれた。また、支えてもらったことに関しては、感謝の気持ちでいっぱいである。

私が高校生だった頃は、団塊の世代の最初で進学は大変であったが、勉強ができ、また、自由であった3年間は至福の時期であり、伏せて卵を温める時期であったのかと思っている。就職するにせよ、大学に進学するにせよ、様々なことに取り組んだ3年間だったと思うにつけ、高校の在り方についてはしっかりと考え、20年後、30年後、50年後に資する京都の教育をつくってもらいたいという思いである。

検討会議での委員意見のポイントに沿って、まず、1点目の地域との連携だが、これについては十分に取り組んでもらっているので、今後も継続してもらいたい。

2点目の学校規模と教育の質についてだが、特に教育の質については、指導力の充実に向け、先生方が誇れる教育内容、あるいは教育実績につながるような配置をお願いしたい。そのためには教員の定数が課題となるが、京都式として、できるだけ

け少人数に目配りや気配りができるようにしてもらいたい。例えば、全国区になった場合でも安心して進学させられる体制が必要であると思う。私も伊根町から宮津高校に進学した際、言葉にもものすごくコンプレックスを感じたが、大きな学校を経験することで、そのコンプレックスがバネになると思う。3学級は最低確保するというのではなく、できるだけコンパクトに再編をしてもらえばよい。40人定数から20人の少人数指導などを工夫していくということになるのだと思う。

3点目の通学についてであるが、高校生の体力や心のことを考えると、1時間ぐらいは通学範囲ではないかと思っている。そのための公共機交通関の確保は必要だと思うが、スクールバスの導入や全寮制といったことも検討してはどうかと思う。

4点目の公立と私立の在り方や連携については、おそらくすべての高校に建学の精神があり、校歌にもそれが反映されていると思っている。そういう意味で、共存して、それぞれの建学の精神に合った自由な校風で子どもたちを導いてもらいたい。特に京都暁星高校だが、私も卒業式や入学式に行かせてもらったことがあるが、とても感銘を受ける式辞であった。互いに切磋琢磨してもらいたい。

最後に5点目の専門的な学びや多様な学びの提供であるが、様々な工夫ができると思う。特に多様な学びについては、現在、伊根分校は定時制の4修制であるが、5年間の高校教育もあっていいのではないか。3年で卒業する子、4年で卒業する子、5年で卒業する子など、多様な学び方ができる工夫をしていけると良いと思う。

- 与謝野町においても児童生徒数の減少に伴い、現在、小学校の再編について方針の見直しを進めているところである。本懇話会は、小・中学校の教員や地域の方々が、それぞれの地域の今後の有り様について考えていく良い機会であり、みなさま方の意見も聞いてみたいと私自身は思っているところである。

先ほどもあったように、私も「丹後地域だから不利になる」ということは絶対に避けてほしいと思っている。昨年、府立清明高校に見学に行かせていただいたが、すばらしい教育が行われており、大変羨ましく感じた。例えば北部地域にもこういう高校があるといいなあとと思っている。南部地域において進められている様々な取組や学科とまではいかななくても、例えば、国際的なコースなど、他地域からも丹後にきて学んでみたいと思うようなコースを設置するなど、丹後の子どもたちにも多様な教育機会を提供してもらえたらとつくづく思っている。不登校を経験した生徒には清明高校のような教育を提供してもらおうなど、丹後地域に住んでいて不利だったということにならないように進めてもらいたい。

- この懇話会に私学を参加させていただき、感謝している。丹後地域では昔から公立志向が強く、公立しか高校ではないというような地域の中で、本校は、女子校時代から非常に規模の小さな高校としての生き方を進めてきた。スクールバスや寮などを整備しており、全域から生徒が集まってきている。

そうした中で、本校の場合、卒業後に他地域の専門学校などに進学しても、地域に帰ってくる生徒が非常に多いと感じている。特に、介護や看護、幼児教育といった女子が多い分野ではその傾向が強い。丹後地域にある唯一の私学として、小さいながらも貢献しているということを意識して検討いただけたらと思っている。

私はある一定の規模の生徒数は必要だと思う。本校の場合、募集定員が90名、実際に入学してくる生徒は70名程度であるため、教員配置の問題や分掌の問題、それから広域から通学しているため、クラブの活性化の問題など、様々なことに対して目を瞑っていかなければならない。その中で何を選ぶかを考え、本校において一人一人の生徒と向き合うという教育に切り替えてきた。各地域の高校の歴史や伝統は、それぞれすばらしいものであり、その地域から高校がなくなることは考えられないかもしれないが、今後の中学校卒業生徒数の推計を踏まえると、丹後地域全体を見て普通科や専門学科の数などを少し整理してみる必要もあるのではないか。

生徒の急減期における教育改革や入試制度の見直しについて、その評価を検証し

てみるということも必要だと思っている。その中で、今後の子どもの数を踏まえると、募集定員を減らしていった各高校が生き残っていくという形ではなく、(高校を)整理していく必要があるのではないかと考えている。

- 北部地域において、公立高校とともに高校教育の一端を担っているという立場で私学からも参加させてもらっている。

理事長という肩書きは経営者という印象が強いと思うが、私自身は教育に情熱を持っている元教員である。現在、北部地域における地域創生は急務で、おそらくその基盤は産業であろうと認識している。そして、その産業を支えるのは人であり、そうした中で社会に出る一歩手前の段階である高校の役割は大きい。

例えば経済産業省などは、社会人基礎力を急務で付けろと言っているし、昨日も首相官邸のホームページを見ると、日本のこの厳しい状況をこれ以上悪化しないように維持するためには、基礎的能力と社会人基礎力がどうしても必要だと求めている。国を挙げた施策としてそうした力を付けていこう、と書かれている。それは何かというと、結局は人の力である。意欲的に何か頑張れるものがあり、意識できる良きライバルが近くにいる時に人は育っていくものだと思っている。勉強、クラブ、その他のいろいろな活動において、一定の、または、多数の集団の中で揉まれる。例えば、1学級40名しかいない学校の中で1番の子がいたとする。その場合はおそらく楽をしても勉強や部活動で1番が維持できる質の高い子もいる。しかし、4学級160名の学校であれば、自分と同じレベルの人が少なくとも4人はいるわけである。そこでの意識と頑張りが実は人を伸ばすということが重要で、政府が言っているのはそういうことだと思っている。人間力というか、前に一歩踏み出す力。そして、チームで協力する力といったものをきちんと身につけた人が産業界に数%でも増えれば、その産業においてもっと有益な事業がいろいろとできるし、日本に利益が増えるという観点で考えると、社会に出る一歩手前の高校においては、一定の生徒数の規模が不可欠だということになる。

その弊害として、先ほどから出ているように、地域ということを見ると、高校が遠くなってしまふことは確かに痛い一面もあるが、社会人基礎力や人との関わりで培われる様々な貴重な力を身に付けさせ、本府を支える人材を育成するためには、私見ではあるが、1学年160名、4学級は必要だと考える。このくらいの規模であれば、様々なクラブが設置でき、1クラブに所属する生徒数も一定確保でき、その中で揉まれて育っていくという感覚を持っている。もしも4学級が無理であれば、少なくとも3学級、120名ぐらいの学年構成で学校全体としては360名であればと思う。(高校を)何とか整理をして、集団で何かをする、ライバルと競い合うといったことが可能な環境にすることが、この地域を支える人材の育成につながるのではないかとこの見解である。

- 本校では、定時制の伊根分校、本校の普通科と建築科があり、様々な生徒が学んでいる。そうした中で、伊根分校においては、4年間をかけてしっかりと自信をつけて社会につなげていくという教育をしている。また、建築科では、専門性を培いつつ、建築を通して学びを深めている。卒業後に進学をする生徒もいれば、就職をする生徒もいるが、必ずしも全員が建築の専門分野に進むわけではない。むしろ、建築科で学んだことを活かしながら、もっと広い視点で新しい分野に挑戦している生徒も数多くいる。そうした生徒たちにきちんと対応できるだけの3年間の教育を行っているのが本校の建築科である。さらに、普通科では、医学系や文系、理系の大学、国公立大学、専門学校に進学する生徒もいるなど、様々な進路が想定されるので、その進路実現に向けて、教職員が一丸となって指導に当たっている。

先ほどもあったように、入学してくる段階で明確な進路目標を持って、将来自分はこうなりたいと言い切れる生徒は確かに少ない。したがって、どの高校においても、入学した当初から、夢をもつこと。あるいは自分の可能性を高めることを問い

かけながら、もっとも多感な年頃の生徒たちに、年齢に応じて様々な刺激を与えているところである。夢に挑戦することを教育目標とし、どのような社会に出て行ってもしっかりと基礎力をもって対応できるように、基礎的な学力をつけてやらなければならない。そのため授業を大切にしており、授業にかける教員のエネルギーは大変なものである。

また、学力だけではなく、同時に人間性も培う必要がある。そのためには部活動なども欠かせない活動である。生徒それぞれに個性があり、例えば、文化系で力を発揮する生徒もいれば、体育系で力を発揮する生徒もいる。体育系の中でもチームワークを重視したスポーツもあれば、個人で勝負できる競技もある。それぞれの特性に合わせた競技、あるいは文化活動ができるように、高校としては最大限、高校生に夢や希望を与えられる環境を整えているのが実状であり、それが高校の役割だと考えている。

さらに、ふるさと丹後に関心を持たせる教育に、ここ数年、どの高校も力を入れている。実際、地域において高校生が活躍する場面を多くのみなさまに御覧いただいているのではないかと思う。地域と関わることで、ふるさとへの誇りや愛着心が培われていると感じている。進学や就職でこの地域を離れても、やがてはふるさとに帰ってこようという思いを持つ生徒もいるだろうし、我がふるさとはこういうところだということを他地域で誇れる生徒を育てることが高校教育の目標だとも思っており、そうした活動にも力を入れているところである。

そうした活動をそれぞれの分野で充実させようとする、教員のエネルギーは大変なものがあるし、個人的な教員の指導力だけではもたない。教員がチームを組んで、それぞれの教員の特性や持ち味を活かしながら、チームワークを持って個々の生徒の成長を指導していくことが必要になる。そのためにはある一定の規模が必要だと思っているところである。ただし、中には大きな集団に入りにくい生徒もいる。そうした生徒たちには、小さな集団の中で個性をしっかりと発揮し、充実した高校生活を送れるような環境を整えてやることも我々の務めだと考えるし、現在もそういう取組をしているところである。

- 本校は目的のはっきりしている学校であり、宮津を中心とした北部地域の水産業の担い手育成が使命だと思っている。近畿唯一の水産・海洋系の高校であるため、129の中学校から入学をしてきている。そのため、約半数が下宿生や寮生であり、中学校卒業後に早くも自立した生活をしている状況である。

中学校卒業段階では明確な進路が見えていないということもあり、本校の1年生では広く水産について学ぶこととし、海洋学科群として100名の募集をしている。

卒業後は約7割が学んだことの関連産業へと就職をしている。かつて就職する生徒が多かったが、次第に進学する生徒が増え、今では進学をする生徒の方が若干上回ってきている状況である。

先日の阿蘇海フェアでも、ホンモロコやなまこ、ブイヤベースラーメンなど、様々な面でみなさんに応援していただいた。地域と一体化し、守っていただき、連携させていただいているありがたい高校であると思っている。

- 少子化の中ではあるが、例えば、この地域に住む祖父母のもとに孫と一緒に住んで地域の高校に通うことを認めるなどして、生徒を増やす努力をしておく必要があるのではないかと思っている。そうした努力もしながら、地域の活性化を考えた場合、交通事情など様々な状況も踏まえると、近くに高校があるということも大切であると考えている。そういう意味で、加悦谷高校についてはぜひ存続という方向で考えてもらいたいというのが学校としての思いである。

また、専門性についてであるが、高校3年間で職業的な専門技術・知識を完成させ、スペシャリストを育成することが難しい分野もある。丹後地域に専門学校をつくらうといったことも併せて考えながら、地域に貢献できる人材の育成を考えていく

べきではないかと考えている。

- まず学校の規模だが、先ほども意見が出ていたように、ある一定の大きさがないと学校の様々な機能が果たせないということをまず考えてもらいたい。現在峰山高校は6学級だが、6学級あるので多様な部活動や授業が提供できていると考えている。

一方で、弥栄分校には50名から60名の生徒がいるが、小さな学校であるが故にきめ細かな教育ができています。

先ほども今ある地に必ずしもなくても良いという意見もあったが、平成41年には現在の6割ぐらいの生徒数になることも踏まえると、現在の規模で全校を維持することはできないのだから、現在の分校の果たしている機能をどこかに置くことは前提としながらも、場合によっては統合・廃止等も必要ではないかと考えている。

次に、普通科志向についてだが、我々の高校時代には峰山高校にも4つの専門学科があり、多くの生徒が就職していた。しかし、現在、分校も含め、峰山高校生の就職希望者は多くとらえても10%。本校だけなら5%前後とかなり少ない。全体として普通科志向になるのは当然のことであると考えます。しかし、丹後機械工業協同組合や企業の方と話す中で、高校卒業後、あるいは高校生が一旦出て行ってからまた帰ってくるということに期待していただいているという声も数多く聞かせていただいた。先ほどもあったように、それでは通学圏全体として考えた場合、どのような職業学科が必要なのか。このことについて、具体的な意見を出し合いながら、考えていただければと思っています。

最後は特別支援教育についてだが、高校は適格者主義のもと、その学校で学べる能力のある子どもたちを入学選抜等を経て受け入れるべきだと考えています。そのため、一定の募集定員を設定して選抜が行われているわけですが、定員を満たしていないから、あるいは、保護者の希望や思いもあって、現在の分校には様々な課題のある生徒が入学してきている。その中には、知的障害の生徒もいるが、多くの高校の教員は障害のある生徒の指導について研修等を受けていないため、かなり苦勞をしています。卒業にあたっては、特別支援学校のセンター機能や関係機関等の様々な協力を得ながら、多くは就職までたどりついていくが、就労後の状況調査まではしっかりとできていない。そうしたことも検証しながら、高校としての教育の在り方全体として考えていく必要があると思っています。

- 私は29年間丹後地域の高校に勤めたが、丹後の人間ではない。しかし、丹後は大好きである。子どもたちにとって行きたい学校がある。やりたい学科がある。それがベストだと思う。どのようにすれば一番良い形になるのかということをお我々大人が考えるべきだと思う。この丹後が発展するように、お金や知識などを皆が出し合おうという時代が来たと思っています。

- 久美浜高校は地域に守られ、地域とともに歩んできた高校である。そういう意味で、地域にとって小さくても高校は必要であると思っています。

- 丹後広域振興局では、地域を元気に、そしてこれからもずっとより良い、暮らし良い地域にということで、平成26年度に地域振興計画を策定した。一旦は進学等でこの地域を離れる子どもたちが数多くいるため、地域振興計画の一つとして、この地域を担う人材に視点を置いて、地域に愛着を持ち、いずれはこの地域に帰ってきて地域を担ってもらいたいという思いで、教育局と協力した「TOMORROW丹後」の取組を行うこととしたところである。

子どもたちが夢を持って高校から次へ進むという時には、未来に向けて自分の選択ができるような仕組みが必要であると思っています。いずれはこの地域に帰ってきて、地域の産業、経済、暮らしを担ってくれる、未来を担える人材の育成について

一緒に考えていきたいと思っている。

各産業界の方々からも、「こういう人材を求めたい」という声を数多く聞いている。丹後の産業と言えば、観光、それからものづくり。観光の中には、農業、漁業も含めた食に関連するものも含んで、地域を振興していこうと考えているので、そういう点も踏まえて意見をいただきたいと思っている。

- 本日は1回目ということで、様々な御意見が出されて、自分の考えの参考になっているが、内容がかなり幅広くなりすぎているようにも感じる。
次回はもう少し焦点を絞って話ができれば、私なりの考えも言えるのではないかと思うので、先の検討会議を踏まえた府としての一定の方向性といったものがあるのであれば、それを示してもらえればと思うがいかがか。検討してもらいたい。
- ◇ ただいまの御意見や先ほどいただいた府教委としても聞きたい点をもう少しはっきりと示してもらいたいという御意見も踏まえ、次回で議論をいただく点について整理させていただく。